

第 34 回目 新しい人を身に着る (6)

はじめに

●今回は、「古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に着る」(4 章 22, 24 節)ということについての第 6 回目の学びです。「新しい人」とは、「神にかたどって造り出された、新しい人のこと」。つまり、イエス・キリストを信じて神の子どもとされたクリスチャンのことです。これまで、「古い人」と「新しい人」の生き方の違いをパウロは述べてきました。

古い人を脱ぐ	新しい人を着る
(1) 偽りを捨てる(自分を飾らない)	(1) 真実を語る(ありのままの自分)
(2) 憤ったままではいけない	(2) 悪魔に機会を与えないために赦しなさい
(3) 悪い言葉を一切口から出さない	(3) 人の徳を養うのに役立つことばを語れ
(4) 盗んではならない(いいとこどりするな)	(4) 働いて与えなさい(施しができるほどに)
(5) 無慈悲、憤り、叫びを一切捨てよ	(5) 親切な、心の優しい人になりなさい

●ここにあげられている「古い人」が「新しい人」を着るその内容は、すべて「かかわり」に関するものです。人と人のかかわり、特に、主にある兄弟姉妹たちのかかわりに関するものばかりです。この新しいかかわりを生きるために聖霊と言う「助け主」が遣わされました。パウロは「聖霊を悲しませてはなりません」と言いましたが、もし、その方が悲しまれるとするならば、それはかかわりの悲しみです。なぜなら、古い人が着ている「偽り(不正直)、怒り(憤り)、悪い言葉(愚かな、聞くに堪えない、ふざけたことば、人の存在や心を傷つけることば)、盗み、悪意をもった無慈悲や憤り、叫び、そしり」などは、「キリストのからだという有機的なかかわり」を破壊するものだからです。もし私たちがそうした罪に気づかなかったとしたら、聖霊が悲しまれるのです。なぜなら、その方は愛のかかわりをもたすために私たちに遣わされた方だからです。

●この方が悲しまれるところに、キリストのからだを建て上げることは不可能です。教会間における様々な対立、主にある兄弟姉妹たちにおける対立・・・は、すべて聖霊の悲しまれるところでは、使徒パウロがエペソ人への手紙を書いた目的は、キリストのからだである教会を建て上げさせるためでした。人と人との間に存在するすべての「隔ての壁」を打ち壊して平和を実現し、キリストにあってすべてが「一つになる」という神の夢を実現するためです。ですから、パウロは「神の聖霊を悲しませてはいけません」と言っているのです。この方の声は細き声です。私たちが静まるときを持たない限り、聞こえてこない細き声です。

●さて、今回は「キリストのからだを建て上げる」上でもう一度、大切なことを心に留めたいと思います。それは 5 章 1～2 節のみことばです。

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 5 章 1～2 節

1 ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。

אגרת שאל אל האפסים

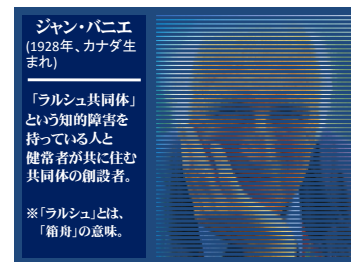
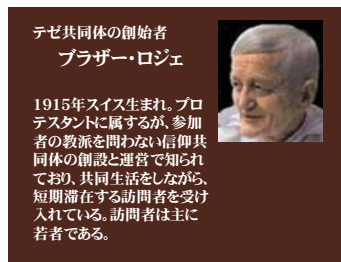
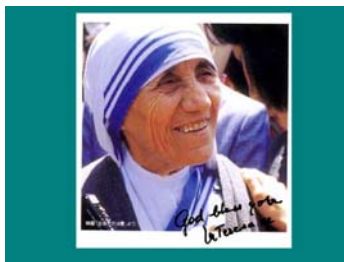
2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

【新共同訳】

- 1 あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。
- 2 キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。

1. キリストの愛のうちに歩んだ現代の三聖人から学ぶこと

●現代の三聖人と呼ばれる人々(マザー・テレサ、ブラザー・ロジェ、ジャン・バニエ)に注目したいと思います。彼らに共通することはなにか。一つは、キリストの愛によって生きた人々です。そしてもうひとつは、様々な領域にある「隔ての壁」を打ち砕いた人々でもあります。



(1) マザー・テレサ

●(本名はアグネス・ゴンジャ・ボヤジュ)。「マザー」は指導的な修道女への敬称であり、「テレサ」は修道名です。インドのカルカッタという所で最も貧しい人々(ヒンズー教徒であろうと、イスラム教徒であろうと関係なく仕えました。最初はだれの助けもなく始まりました。やがてマザーのもとに多くのシスターたちが集まるようになり、その働きを支えるようになりました。カルカッタで始まったマザー・テレサの働きは決して軽いものではありませんでした。「神の愛の宣教者会」を創設し、その活動は高く評価されました。貧しい者と富める者、異なる宗教間にある隔ての壁を壊した人と言えます。

(2) ブラザー・ロジェ

●(本名は、ロジェ・ルイ・シュツツ=マルソーシュ) ロジェは、プロテスタントの牧師でしたが、第二次世界大戦中に、テゼという小さな村に移り住み、そこでユダヤ人を匿まったり、難民を支援したり、カソリック、プロテスタントを越えた共同生活―「テゼ共同体」を結成しました。

●人類を引き裂いた世界大戦のただ中であって、まだ 25 歳の彼は、人々との和解を日々実際に生きてゆくようなキリスト者のコミュニティーを創設しようと思い巡らしていました。彼が、自分の故郷であるスイスを離れて、フランスの小さな村テゼにたどりついたとき、一軒の家が売りに出されているのを知りました。テゼで彼を迎え

たのはひとりの老婦人でした。彼は彼女に自分の夢を話すと、彼女は「ここにとどまって下さい。私たちはここで孤独なのです。」と言いました。ロジェはこの老婦人を通して神が語りかけていると感じて、そこに移り住みました。そして彼はここで、人類のさまざまな分裂を乗り越えるために、まず、キリスト者の間に和解の道を開こうとしたのです。

●聖書に教えられている和解の共同体のひとつのたとえとして生きること、その夢を実現すべく彼は共同体の生活を始めたのです。とはいえ、三年間はただ一人の生活を余儀なくされました。しかし四年目に数人の主にある兄弟とともに、生涯を祈りのために共に生きる誓願を立てて、共同体がスタートしました。最初はプロテスタントの兄弟たちだけでしたが、次第にカソリックの兄弟たちも加わるようになりました。現在は大変な数の兄弟たちになっているようです。彼らの祈りのために歌われる歌(賛美)も実にユニークです。私たちの教会でも二、三曲取り入れて歌っています。

●しかし、ブラザー・ロジェは2005年、テゼの集會に参加していたひとりの女性によって刺殺されました。90歳。現在も世界中から多くの若者たちがテゼを訪れているといひます。彼の最も大きな貢献は、カソリックとプロテスタントの間にある「隔ての壁」を打ち壊して融和させたことです。長い間、こうした取り組みはエキュメニカル運動だとして、特に、プロテスタントの教会においては聖書的ではないとして受け入れられませんでした。しかし今や、神のみこころはそうではないようです。

●ところで、今日、プロテスタントの教会で、最も読まれているカソリックの流れをもった本は、ヘンリー・ノウエンという人の本だそうです。彼は、カソリックの司祭であり、世界の有名な大学で教鞭をとってきた神学者・教師でもあります。彼の靈性は今日の福音派と言われる教会に大きな影響を与え始めています。ヘンリー・ノウエンは実に多くの本を残していますが、その中で最高傑作と言われているのが「放蕩息子の帰郷」という本です。ヘンリー・ノウエンがレンブラントという画家の描いた「放蕩息子の帰郷」に出会って、瞑想の結実として記されたものですが、実に深い内容を持っています。私が放蕩息子の話をするときには必ず、このノウエンの解釈が入っています。話が横道にそれてしまいましたが、このノウエンに多大な影響を与えた人が、実は今、これから話そうとしているジャン・バニエという人なのです。このジャン・バニエの影響で、ヘンリー・ノウエンは晩年、ラルシュ共同体で牧師として生活するようになります。そこで彼は豊かに実を結ぶようになったのですが、そこは、彼が今まで経験してきたものが一切通用しない世界だったのです。牧する対象は、知的障害をもった人たちだったからです。知的な面においてだれからもひけを取らない経験豊かなノウエンが、それを一切必要としない世界へ導かれたことで、より深い神の愛の世界に導かれていくのです。

(3) ジャン・バニエ

●彼は、知的及び身体的ハンディを抱えた者と健常者が共に住むというフランスの片田舎で「ラルシュ共同体」を設立。彼自身はインテリで、料理も苦手であったので、共同生活は当初、困難を極めました。しかし彼の生き方、考え方は多くの人々に光を投げかけ、現在、世界中 110 箇所のラルシュ共同体があります。キリストのからだなる教会を考えると、このラルシュ共同体から学ぶことは非常に大きいです。

●ジャン・バニエはマザー・テレサ、ブラザー・ロジエと並んで、現代の三大聖人と呼ばれる一人です。

彼は 1928 年、カナダ生まれ、お父さんはイギリスのカナダ総督という恵まれた家庭環境で育ちました。1950 年代、彼はフランスのパリで哲学、神学を学びました。その後、さまざまな霊的な遍歴を重ねながら、1964 年 (36 歳の時)に、トマ神父に誘われて、北フランスにある「障害者の家」に一緒に行きました。そこで彼は、知的ハンディおよび身体的なハンディを持つ人たちに出会ったのです。そのことがジャン・バニエの生き方を大きく変えることとなったのです。

●バニエさんがフランスのトロリーという村にある精神病院を訪ねた時のことでした。大きな部屋にベッドがたくさん並んでいて、その一つに障害を持った人が身体を固くして横たわっていました。顔はまったくの無表情。バニエさんはその人に声をかけて抱き上げました。彼はとても大柄な人です。若いからそんなことができたのでしょう。すると抱かれた人はそれまでの緊張をゆるめて、バニエさんを見てニコニコ笑ったのです。しばらくしてその人をベッドに降ろしました。するとその人はまた元のように身体を固くして無表情になってしまいました。バニエさんは、その部屋の中に抱き上げてやさしく話をしてくれる人を待っている人が大勢いることに気がついて愕然としたそうです。

●それから、バニエさんは知的な障害を持った三人の方と暮らし始めました。とても大変な生活でした。バニエさん自身が料理が下手でしたし、その三人はそれぞれの家庭でも看ることができないで精神病院に入れられた人たちであったので、共同生活は困難を極めました。三人のうちの一人在精神病院へ戻りました。残った二人の者も時折、非常に暴れるので、彼はほとんど困り果てたのです。「でも病院へは戻したくない、彼らはなぜ暴れるのだろう」と考えました。そして彼はその答えを見つけたのです。彼らは叫んでいるのだ—家庭において障害をもって生まれたというだけで、その存在を歓迎されることなく、「あなたが障害を持って生まれたために、私たちはみなこんなに迷惑している」という言葉の暴力を受け、また、「言ってもわからないなら」と、その言葉を身体への暴力に変えられて、それを受け続け、それをずっと我慢してきたのです。そしてその我慢ができなくなって彼らは暴れているのだ、と。彼らが暴れたりするのは、彼らなりの精一杯の叫び—「私だって人間なのだ。馬鹿にするな」というメッセージなのだ、とわかったのです。

●ジャン・バニエは、知的な障害のために共同生活が難しい人たちは大きな施設ではなく、より家庭的な環境で守られたほうが良いと考えて、実際には障害をもった数人とアシスタントと言われる援助者が数人で一緒に住むというグループホームを作りました。そのようなグループホームが「ラルシュ・コミュニティ」(ラルシュ共同体)なのです。「ラルシュ」とは、「箱舟」という意味です。このジャン・バニエさんの生き方と考え方は、多くの人々に光を投げかけ、今、現在は世界中で 110 箇所の「ラルシュ共同体」が設立するようになったのです。日本には静岡に一つ「ラルシュ・カナの家」というのがあります。

●私たちが暮らしている社会は競争社会です。マラソンに象徴されるように、とにかく一番になることを目指すような考え方です。人々から賞賛されるためには、頑張らなければなりません。栄光や賞賛、富や地位、名声を

得るためには、とにかく頑張らなければならないのです。そうした生き方からは、人を思いやる余裕は出て来ません。自分のことで心がいっぱいですから、人にかかわることを嫌います。かかわるにしても自分の利得に合う人を選びます。とにかく、人に受け入れてもらうには頑張って、上を目指さなくてはならないのです。それができないならば、せめても、人の迷惑や世話をかけるような者にはなるな、と自分に言い聞かせなければならないのです。これがこの世の価値観です。

●確かに、この世の価値観にも肯定すべき面があります。そこには活気があること、そのためには能力を最大限に伸ばして、その人の最も良いところを発揮できるようにする。競争し、人に認められ、賞賛されることを求める欲求がなければ、人類はこれほどまでに発展することはなかったと思います。より優れたものへの探求心が良いものを生み出してきました。しかし、否定的な面もあります。競争の社会では、一人の人が賞賛を受けるために、どれほど多くの人が賞賛を失い、自信を失っていることでしょうか。スポーツの世界や科学の世界は、必ず、追い越され、長い間かけて得た賞賛も束の間の栄光でしかありません。そうした束の間の賞賛を得るために、人生の多くの時間を消費するのです。そうした賞賛を得られない人は、別のもので多くの時間と財を消費するのです。このような世界では、「低さ」に対する価値はほとんど認められません。

●しかしながら、ジャン・バニエが、今日、多くの若者の心を捉え、現代の聖人と言われる所以は、「低さ」の価値、その価値を訴えたからです。と同時に、今日の競争社会、物質的で個人主義の社会が、どれほど非人間的なものかを訴えたからなのです。イエシュアは「貧しい者」の友となりました。貧しい者の友となるということは、人の深みにまで触れることを要求されます。それゆえ、そうした恐れゆえに、さまざまなハンディをもった人は社会から隔絶されてきました。なぜなら、彼らの存在は私たちの弱さ、愛の貧しさを突きつける存在だからです。ですから、貧しい者を受け入れ、さまざまなハンディをもった人を受け入れることは、ましてやそうした人たちと親しい家族として生きることは、私たちにとって不可能です。それゆえ、イエシュアの愛を知り、その愛にとどまりつづけ、神の助けをいただかなければかかわることのできない世界です。ハンディを持った人の存在、そしてそうした人々と交わることは、実は、健常者と言われる人の貧しさを豊かにする道なのです。

2. 自分が神によって愛されているという自覚の豊かさを育む

●現代の三聖人の中で、マザー・テレサとジャン・バニエは裕福な家で育ちました。それなりの教育も受けることができました。知的な面において恵まれた境遇にありました。しかし、より大切なことは、彼らがみなそれぞれ神の愛を豊かに経験した人たちであったということです。このことはとても大切です。私たちは神に愛されている神の子どもです。この確信を絶えず、どんなときにも、持っていることが重要なのです。

●イエシュアは言われました。「わたしにとどまっていなさい。私が父にとどまっているように。わたしのことばにとどまっていなさい。わたしが父のことばにとどまっているように。わたしの愛の中にとどまっていなさい。わたしが父の愛にとどまっているのと同様に。」

●これが私たちのいるべき場所であり、座すべき場所です。とどまることをイエシュアから学ばなければなりません。イエシュアとの親しい交わりに多くの時間をかけるならば、イエシュアのように「愛する」ということを喜びとして受け入れられるようになります。

3. マナの原則を生きた御子イエシュアに倣う

◆今回のテーマは「愛のうちを歩みなさい」です。神に愛されている子どもらしく愛のうちを歩むこと、そのためには、いつも、キリストのくびきを負って、キリストから学ばなければなりません。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 11章 28～30節

28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。

そうすればたましいに安らぎが来ます。

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

●イエシュアの有名な招きの言葉ですが、このことばほど正しく理解されていないことばはありません。特に、「くびきを負う」という点に関してです。キリストのように愛する力は、一日一日、天から新しく補給される必要があります。マナの原則です。主のための働きは、力を使うことがあっても、力を補充することは決してありません。御子イエシュアの愛の源泉は、愛による働きの源泉は、常に、日々、御父の愛の中に、御父の御顔の光の中に自らを置いたことにありました。私たちもこの御子に倣わなければなりません。これがイエシュアとくびきを共にするという本当の意味です。働きの前にくびきが共にされるといふ祝福を十分にたくわえる必要があるのです。「働きのためにくびきを共にする」という「働き」に重きをおくならば、このみことばの意味を正しく理解していません。



●ヨハネという人は、「くびきを共にする」ことを「とどまる」という言い方をしました。「とどまる」ことからすべてが始まっていくのです。そのことを御子から学ぶのです。こうした歩みが、おのずと十字架への道へとつながっていくのです。キリストのくびきを負ってキリストと共に歩むこと、キリストと共に御父の愛のうちにとどまることを通して、愛のうちを歩むことができるようになります、そして、愛における豊かな実を結ぶことができますと信じます。私たちもそうした実を結びたいと願うならば、マナの原則を実践しなければなりません。それは働きではなく、とどまること、御父の愛を深く知ることなのです。